人権だより No.285(2021.11)

人間を信じるということ。

研究情報図書部 課長 石丸 聖也

今年度の第67回青少年読書感想文全国コンクール・高校生の部の課題図書は、3作品中、2作品が人権について主に考えさせられるものでした。その2作品とは、「水を縫う」（寺地はるな、集英社）と「兄の名は、ジェシカ」（ジョン・ボイン 著、原田 勝 訳、あすなろ書房）です。課題図書でチャレンジした人もいましたが、ほとんどの人がそれとは違う作品で読書感想文を書いていたので、この機会にぜひ読んでみてもらいたいと思い、ちょっとだけ紹介します。

「兄の名は、ジェシカ」は、トランスジェンダーである兄について、弟の目線で描かれている作品です。「今は理解したいだけです。どうすれば本当の自分になれるのか、そして、自分らしい生き方ができるようになるのか知りたいんです。今はもう、ジェイソンとしてすごす毎日が、二十四時間うそでできているように感じます。うそをつきながら生きていきたくありません」無理やり連れてこられた精神科医の前で、ジェイソンはこのように家族に告白します。

「水を縫う」は、「男なのに」裁縫が趣味で刺繍が好きな弟の清澄、「女なのに」かわいいものが苦手な姉の水青、そして、母親のさつ子、祖母の文枝、父親の全の友人の黒田という「普通」とは違う登場人物たちが語る六つの章で構成されています。「女らしいとか男らしいということ自体よくわからない。そんなめんどくさいもん、いる？ と思わずにいられない。」「さびしさをごまかすために、自分の好きなことを好きでないふりをするのは、好きではないことを好きなふりをするのは、もっともっとさびしい。」「自分と違うやりかたを選ぶ人を否定するような生きかたを、僕はしない。したくない。」これらはすべて、清澄の言葉です。

どうせこうだと決めつけず、関わりを通じて相手をわかろうとする姿勢と自分の思いをちゃんと伝えようと努力することの大切さを感じました。また、「家族」についても改めて考えされられました。もちろん2作品とも図書館にあります。ぜひご一読あれ！

【人権委員の声】

僕も相手を大切にし、何事にもすぐにだめだと決めつけず、それを乗り越えて努力することが大切だと改めて感じることができました。（1年 渡辺 泰史）

自分が周りに認められているという大切さが分かりました。「男だから」「女だから」という固定観念がなくなればいいなと思います。人の気持ちを分かってあげられる人間になりたなと思いました。（2年 大下 葵）

噂や性別から相手のことを勝手にきめつけるのではなく、実際に会ったり直接話をしたりすることが大切だということが分かりました。また、周りに合わせて“自分らしさ”を失わないように、もし誤解されていたらきちんと相手に個性を理解してもらおうと思いました。（3年 吉村 藍香）

「人間は、本能で自分たちとは違うと感じたら排除しようとする、だから差別は起こる」と聞いたことがありますが、私はそれが差別を正当化する理由にはならないと思います。人間には、自分で考えて行動する力があるので、「本能」と言う言葉で片付けてしまうのではなく、自分自身の行動に責任を持つことが大事だと思いました。（3年 平田 瑠花）

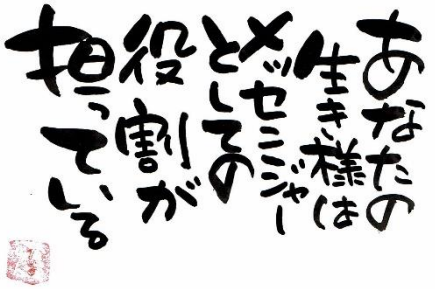
自分が思う「普通」を他の人に押し付けないようにしないといけないと思いました。この2冊の本を読んでみたいと思いました。（4年 山本 修斗）

自分はジェンダー問題に理解がある方だと思っていたけれど、「男なのに」「女なのに」という言葉を使ってしまったことがあったなと反省しました。人をグループ分けして、それに当てはまらない人がいたら排除するのではなく、その人の個性を尊重し、理解しようと努力する姿勢が大切だと感じました。（5年 薬師神 有菜）

最近男女間の平等について話題に上がるのをよく見ます。そのたびに、社会全体でジェンダー差別をなくす活動についても聞きます。自分自身も他人事だと思わず、そういった活動に積極的に取り組みたいと思います。（6年 河野 泰生）

【字を識る】 救いは行動にあり

先日敬愛する先生が極楽浄土に旅立たれました。ご冥福をお祈り申し上げます。

その先生が、日ごろから私を導いていただいた言葉が、**「救いは行動にあり」**でした。いくら口ではいいことを言っても、行動が伴わなければ問題は解決しない。出会うこと、学ぶこと、行動することを大切にしようということを教わりました。そして、出会うことは行動するからこそ得られるものであるでもあるということも学びました。みなさんはいい出会いをしていますか？

最近、ある方からまたすてきな言葉をいただきましたので右に紹介します。自分自身の生きざまが問われている。非常に重たい言葉です。